小林秀雄「本居宣長　上下」（新潮文庫版）2014年9月23日　読了

「尋常 の理」に精しくなれば、「其の外に測りがたき妙理　のあることを知る」

以下は、気になった「キーワード（＝読後感?）」です。

下巻p55

「この陰陽の理といふことは、いと昔より、世の人の心の底に深く染着 たることこ

下巻p48

とにて、誰も誰も、天地の自然 の理にて、あらゆる物も事も、此の理をはなるゝこ

となしとぞ思ふめる、そはなほ漢籍 説に惑へる心なり、漢籍 心 を清く洗ひ去りて、

直毘霊

よく思へば、天地はたゞ天地、男女はたゞ男女、水火はたゞ水火にて、おのおのそ

「古 への大御世には、道といふ言挙 もさらになかりき、其は、ただ物にゆく道こ

の性質情状はあれども、そはみな神の御所為にして、然るゆゑのことわりは、いと

そ有りけれ、物にことわりあるべきすべ、万 の教へごとをしも、何の道くれの道と

もいとも奇霊く微妙なる物にしあれば、さらに人のよく測知 べききはにあらず」

いふことは、異国 のさだなり」

下巻p109

漢意 の痼疾

「誦声 の上り下り」

よのつね　こと　かしこ　かみ

「何にまれ、尋常ならず、すぐれたる徳のありて、可畏き物を迦微とは云なり」

かはらぬままに鳥も獣も魚虫も草も木も、いにしへのごとくならぬはなきこと、人

下巻p114

ばかり形はもとの人にて、心のいにしへとことになれるはなし。人はなまじひに智

「物のあはれを知る心」は、「物のかしこきを知る心」を離れる事が出来ない。

て ふ物ありて、おのがじし用い侍るより、たがひの間にさまざまの悪き心の出来て、

我が邦の歴史は、物のかしこきに触れて、直ちに嘆く、その人々の嘆きに始った、

終に世をもみだれ、治れるといへど、かたみに巧あざむきをなすぞかし、若天が下

と古伝の言うところを、宣長は、そのままそっくり信じた。

に一人二人物知ことあらん時は、よき事を有ぬべきを、人はみな智あれば、いかな

「事しあれば、うれしかなしと時々に」動いて止まぬ、弱々しい、不安定な、人の

る事もあひうちと成て、終に用なき事也。今鳥獣の目よりは、人こそわろけれ、か

まごころという、彼の「まごころ」観の、当然の帰結だったから。

れに似ることなかれと教へぬべきもの也。

下巻p155

下巻p284

「凡天地の間に生としいけるものは皆虫ならずや、それが中に人のみいかで貴く、

言霊の自己形成の働きは、「言霊のさきはふ国、たすくる国」と言われていたよう

人のもいか成ことあるにや、から人は人は万物の霊とかいひて、いと人を貴めるを、

な環境では、別して、己れの姿を省みる必要も感じていなかった。長い間、口誦の

おのれが思ふに人は万物の悪しきもととぞいふべき、いかんとなれば、天地日月の

うちに生きてきた古語が、それで済まして来たところへ、漢字の渡来という思いも

掛けぬ事件が出来した。言わば、この突然現れた環境の抵抗に、どう処したらいいり、悪きもあり、さまざまにて、天下の人ことごとく同じき物にあらざれば、神代かという問題に直面し、古語は、初めて己れの「ふり」をはっきり意識する道を歩の神たちも、善事にまれ、悪事にまれ、おのおのその真心によりて行ひ給へる也。き出したのである。

然るを難者、智巧の事などは、真心の行ひにあらずと心得たるは誤れり。（中略）

私達は、漢字漢文を訓読という放れわざで受け止め、鋭敏執拗な長い戦いの末、遂善にもあれ悪にもあれ、生れつきたる心を変てうつるは、皆真心を失ふ也」

にこれを自国語のうちに消化して了った。漢字漢文に対し、このような事を行った

国民は、何処にもなかった。この全く独特な異様と言ってもいい言語経験が、私達の文化の基底に存し、文化の性質を根本から既定していたという事を宣長ほど鋭敏に洞察していた学者は他に誰もいなかったのである。

下巻p366

「真心（まごころ）とは、産巣日神（むすびのかみ）の御霊（みたま）によりて、備（そな）へ持て生れつるままの心をいふ。さてこの真心には、智（たくみ）なるもあり、愚なるもあり、巧（つたな）なるもあり、拙（よき）きもあり、善もあ